

または Kith と呼ばれる。[ZV], 18 n. 1 参照。

86) la malwi 'ala shay'in. [註] 17 を看よ。

87) rabb. [ZV], 18 n. 3 に依れば、此処の rabb は〈神〉の意であり、ベルシア語 khuda, トルコ語の agha (ige) に相当する。[註] 100, 158 を看よ。

88) wa law 'alimnā mā yuridu la-rafa'nā-hu ilay-hi とした。[R], 106 はこの箇所を…… yuridu la-da'fa'nā-hu ilay-hi (われわれは、それを彼に差出す) と推している。[K], 179-80 n. 158 参照。

89) 此処は写本の本文が頗る難解であって、その解釈には諸説が提出されているが、wa fi-hi (=jabal) 'uyūnun tankhariqu 'aynun wa bi'l-hufrati al-mā'u と讀んだ。[ZV], text 10: wa fi-hi 'uyūnun tankharifu 'an-hu wa bi'l-hufrati al-mā'u (Dort [sind] Bäche, die von denen [den Felsen] herabfließen, und das Wasser [unten] im Graben [stehenbleibt]). [C], 67 n. 100: wa fi-hi 'uyūnun tankhariqu ghayr [munqaṭi'a?] wa bi'l-hufrati 'l-mā'u (où se frayent passage des sources non... et dans les creux [de laquelle] séjournerait de l'eau). [C4], 238:yutahazzazu ghadrūn...., [K], 180 n. 165:tankhariqu 'aynun wa bi'l-hufrat al-mā'u. [D], 90: wa fi-hi 'uyūnun tankharifu 'abra-hu wa bi'l-hufrati [tastuqirru] al-mā'a (そこには、深みに水をたたえ、山を横切って流れる [幾筋もの] 小川があった)。

III トルコの諸部族について

§ 1. その山を越えると、グズ al-Ghuzziya と呼ばれるトルコの一部族⁸⁰⁾のところに到着した。

当時、彼らは、羊毛製のテント⁸¹⁾をもって野営したり、移動したりする遊牧の民であった。遊牧民の生活様式と彼らの移動性の故に、ある場所でも、また別の場所でも彼らの同じようなテントを見掛けることが出来るのである。

しかも、彼らは、まるで彷彿い歩く野生ロボに似て⁸²⁾、[非常に]惨めな生活をしており、アッラーフへの信仰は勿論のこと、理性に頼ることもない。しかし全く何の崇拜もしていないというのではなく、彼らは自分達の長老を神と呼ぶ。従って、彼らの一人がある問題で彼の首長(長老)に助言を求めるときには、

「おお神よ！ これこれの件について私は如何にすべきでしょうか」

と言うのである。そして彼らは、どんなことでも互いによく相談し合う⁸³⁾。しかし、ある件で[全員]意見が一致し、決断が下された当座に、彼らの中の最も卑賤・卑劣な者が[その席に]入ってきたならば、すでに決定されたことは無効にされる。

なお、私は、彼らがアッラーフの他に神なし。ムヘンマドはアッラーフの使徒なり^{200a}を唱えているのを聞いたが、それとて格別、その文句を信じているのではなく、彼らのところを通るイスラーム教徒達に近づかんがためにただその言葉を口にする[だけな]のである。

もし彼らの中のある者が不当な目にあったり、不吉な事柄に襲われると、その当人は、頭を空に向けて、

「ビル・テングリ Bir Tankri!

と言う。つまり、ビルはトルコ語で 1 つ、テングリはトルコ語によるアッラーフの意味であるから、それはトルコ語による《唯一の神アッラーフ⁸⁴⁾》のことである。

彼らは、大便や小便をしてもそのままに放置し、性交⁸⁵⁾などを行っても決して体を洗わない⁸⁶⁾。彼らは、ひどく水に見離されており、冬には尚更である⁸⁷⁾。

彼らの女達は男達やよそ者の前でも顔にヴェールを掛けない。それどころか婦人達は誰に対しても決してその身体を隠さない。

ある日、われわれは、彼ら(グズ族)の一人の所に投宿した。われわれは腹をお

ろし、丁度、彼の妻もその場に居合せた。彼女は、われわれに話かけている間、自分の局部をあらわにし、手でこすっていた。まさに目がそこに行ってしまったので、われわれは思わず顔を手で覆い、

「アッラーフよ！ ご寛大であられますように」
と祈った。

すると、その夫は笑って、通訳に言った。

「彼らにこう伝えなさい。『彼女があなた達のいる前でそれをあらわにするのは、あなた達がそれを見たり、覗いたりする為なのであります。が、決してそれに触れてはなりません。本来、それは彼女が覆いかくして、自分のものとしておくことが一番のぞましいのですから、』とな」

彼らは姦通を「罪とは」考えていないが、もしそのようなことが発覚した場合、その当人を次の様な方法で体を真二つに引裂いてしまふ。つまり2本の木の細枝を結び、その枝にしっかりとその人を縛りつけ、次にその2本の木を放つと、離りつけられていた人⁹⁹⁾は引裂かれるのである。

彼らの一人は、私がコーランを誦読しているのを聞いて⁹⁹⁾、コーランに痛く感服してか通訳に向って、

「彼に『コーランの誦読を』やめないでくれ、と言ってくれ」

と言いつ出した。また、ある日、その男は通訳の口を通じて私に次の様なことを言った。

「このアラビア人に言ってくれ。いと高き偉大なるわれらの神¹⁰⁰⁾は妻をおも

ちか、とな」

これを聞いて、私は大変なことになったと思い、《アッラーフよ！ 称えられていませ》と《アッラーフのお許しを乞い願っております》を唱えた。すると彼もまた私が行ったと同じようにアッラーフを称え、アッラーフへのお許しを願った。このように万事、トルコ人の常として彼らはイスラーム教徒がタスビーフとタフリールを唱えているのを聞くと、[真似て] その通りに言うのである。

§ 2. さて、彼らの結婚の慣例は次の通りである。先ず彼らのある者が相手にホラズム製の衣服いくらかと交換で相手の女¹⁰¹⁾——彼の娘、妹、あるいは自由に出来る[女の]人であったりする——を娶りたいと申出る。そして、[その交換額の点で]両者が合意に達すると、[主人は]女を[相手の]彼のところに連れて行く¹⁰²⁾。

結婚持参金¹⁰³⁾は、ときにはラクダや馬などのこともある。何人といえども女の後見人とできめた規定の結婚契約金を「すべて」支払うまでは、妻にすることが出来ない。しかし一たびそれを先方に支払えば、何ら躊躇うことなしに、その女のいる部屋に入っていくことも出来る。そしてその女の両親や兄弟のいる前で女を自分のものにしたりしても、彼らはそのことで何らとがめたりはしない。

fol. 200b 男が妻子を残して死んだとき、しかもすでに夫の母親が亡いときには、その長子とその男の妻と結婚する。

商人やその他の誰であれ[イスラーム教徒は]、人の姿が全く見えないような闇夜のとき以外には、決して彼らのいる前で性交[の後]の水浴をしてはならない。さもないと彼らは、腹を立てて、

「こいつらは、水占卜術をつかって、われわれを魔法にかけようとしてい
る¹⁰⁴⁾」

と言って、罰金刑を科すのである。

§ 3. 彼らの国を通過するイスラーム教徒は何人も必ず彼ら[トルコ人]の一人と親友関係 *sadıq* を結んで、そのトルコ人の家に投宿し、イスラームの国から持ってきた衣服を彼(家の主人)に、その妻には婦人用のヴェール、いくらか胡椒、栗¹⁰⁵⁾、乾ぶどうやクルミを手渡さなければならない。

一方、そのイスラーム教徒が親友[関係を結んだトルコ人]のところに行くとき、当のトルコ人は、テント¹⁰⁶⁾を張ったり、イスラーム教徒自身の手で殺すための羊を出来る限り齎らすのである。なぜ[トルコ人にその羊を料理させない]かと言えば、トルコ人達は羊の喉を切って殺すのではなく、その頭をめった打ちにして殺すのを常としているからである。

彼ら(イスラーム教徒の商人達)のある者が、すでに自分の所有するラクダや馬のあるものが使用不可能となっている上、資金が不足している上、旅立ちた¹⁰⁷⁾いと思つたときには、彼の親友のトルコ人のところに使えなくなったものを残して、代りにトルコ人のラクダ、馬および必要とする金を受取って出発する。そして目的とした旅から帰ってきたとき、その借金を返済し、ラクダと馬を戻すのである。

また、一面識もない人(イスラーム商人)がトルコ人のところを通過して、

「私は、おまえの客だ。ときに私はおまえの[所有している]ラクダ、馬とデ
イルハム貨幣が必要なのだ」

と言えば、トルコ人は先きに述べたと同じように要求された通りのものを渡すので

ある。なお、もし当の商人がその旅行の途中で死亡した場合、[彼の属していた] キャラバン隊が戻ってきたときに、そのトルコ人は、隊の者達に会って、

「私の客はどこにいますか」

と、たづねる。もし彼らが、

「彼は死んだ」

と答えると、トルコ人は「勝手に」キャラバン隊をとめて彼らキャラバン隊の内と一番有力と思われる商人のところに行き、その荷をいっぺんに調べながら聞き、彼(死んだ商人)に「以前貸した」と同額のディルハム貨幣をその商人のもとで受取る。しかし、決して少しと言えども余分に取ることはしない。また馬やラクダについても同じように受取ってから、次の様に言う。

「あの人は、汝のいとこだから、汝が彼の負債を支払うのが最も適切だ」

また「負債をおった」商人が逃げた場合にも「その商人が所属するキャラバン隊の有力商人に」、そのトルコ人は、

「あの人は、汝と同じイスラーム教徒です。汝がその人から取りなさい」

と言って、同じように行うのである。トルコ人がその客であるイスラーム教徒に「帰る」途中で会うことが出来なかったときには、

「彼はどこに居るのですか」

と、相手の居どころをたづねる¹⁰⁸⁾。それがわかれば、トルコ人は数日間、相手を追って旅をつづけて、彼のもとに行く。そこで相手は「[亡く]」その負債を返済することになる。先きに与えられたもの(ラクダや馬)についても同様に。

以下のこともまたトルコ人のするやり方¹⁰⁹⁾である。トルコ人はジュルジャーニヤ[国]に来ると、「自分と親友関係を結んだイスラーム教徒の」客をたづねて、[再び]旅立つまでの間、そこに投宿する。また、もしトルコ人がその親友であるイスラーム教徒のところで死亡したとき、[他の]トルコ人達は、その親友「であるイスラーム教徒の」同行するキャラバン隊がそこ(トルコ国)を通過する機会をねらって、そのイスラーム教徒を殺して、次の様に言う。

fol. 201a 「汝は、彼を監禁の末に殺害した。もし汝が彼を閉込めておかなかったならば、彼は死ななかっただろう」

また、酒¹¹⁰⁾を飲ませたためにトルコ人が城壁から転落した場合も同じように、トルコ人達は「酒を飲ませた」イスラーム教徒を殺す。ところが「殺そうとする」相手がキャラバン隊の中にいなかったときには、そのキャラバン隊の中で一番有力な人に近づいて、その者を殺す。

§ 4. さて、男色行為は、彼らの考えでは大変な罪悪とされている。嘗て、一人のホラズムの人がトルコ王の副官(khalifa)ことクーザルキーン Kudharkin の一部署¹¹¹⁾のところに逗留したことがあった。その男は、しばらくの間、羊の買付けのために彼のトルコ人の客のところに投宿した。そのトルコ人には、まだ寝もはえていない「若い」息子がいた。そのホラズム人は、しきりとその息子をたぶらかして誘い、ついには共に淫らな享楽に耽るに至った。と、その時、トルコ人が入ってきて、その2人の現場を見てしまった。トルコ人は、その件をクーザルキーンに届けた。すると、クーザルキーンは、

「トルコ人を招集せよ」

と命じた。そこで彼は彼らを集めた。集ったとき¹¹²⁾、クーザルキーンは、そのトルコ人に、

「私が判決することを正当と考えるか、不服とするか」

とたづねた。彼は、

「正当でございます」

と答えた。すると、クーザルキーンは彼に、

「汝の息子をここに」

と言ったので、彼は息子をつれてきた。すると、クーザルキーンは、

「この子供も商人も共に殺すのがよからう」

と言った。その言葉にトルコ人は困惑して、

「私の息子を見捨てることはできません」

と言った。クーザルキーンは、

「それでは、その商人については贖金で免除しよう」

と言ったので、その言葉通りに行われた。ホラズム商人は、トルコ人の息子を犯した償いとしてトルコ人に羊をもって贖い、一方、トルコ人は、息子を赦免してくれたことに對して、羊 400 頭をクーザルキーンに差し送った。かくして、そのホラズム商人はトルコ国を立去った。

§ 5. 彼ら「グズ・トルコ族」の王侯、首長達の中で、われわれが最初に出会った人は、下官のヤナール(Yanal al-saghir)であった。彼は、もともとイスラーム教を信奉していたが、人々に、

「もし汝がイスラーム教を信奉するのであれば、もはや私達の首長となることは出来ない」

と言われたために、イスラーム教徒になることをやめた。われわれが彼のもとに着いたとき、彼は、

「おまえ達を通すわけにはゆかぬ。というのはわれわれは、この様なこと¹¹³を全く聞いたことがないし、このようなことが起るうとは思ひも かけなかったのだ」

と言った。そこでわれわれは、ひたすら彼の機嫌をとることに努めた。結局、彼は10ディルハムの値打のあるジュルジャーニーヤ製のハフターン、バーイバーフ bay-baf 貨幣¹¹⁴、数切れのパン、一握りの乾ぶどう、100 箇のクルミをせしめた。われわれがそれらを与えると、彼はわれわれの前に平伏した。なぜならば、この様にある人が相手に何かを贈ったとき、相手はその人の前に平伏するのがトルコ人の慣例なのである。[最後に] 彼は、

「もし、私のテント¹¹⁵が[汝らの行く]道から遠く離れていなければ、汝らに羊や[その他の]もてなし¹¹⁶をしたいのだが」

と言うと、立去っていった。そこで、われわれも旅をつづけた。

その翌日、人相の良くない、風采のあがらず小柄で見窄らしい一人のトルコ人に出会った。そのとき激しく雨が降っていた。その男が、

「とまれ」

と言うと、約 3,000 頭の馬と 5,000 人からなる金キアラバン隊は、とまった。つづいて、彼は「われわれ一行に向って」、

「おまえ達の中の一人と言えども通さぬぞ」

と言った。そこでわれわれは彼の命令にしたがって、しばらく立止まり、

「われわれはクーザルキーンの親友なのだ」

fol. 201b と言うと、彼は笑い出しながら、

「クーザルキーンとは一体誰のことだ。なんならば、クーザルキーンの牝に養をくらわしてやる¹¹⁷」

と答えた。つづいて彼は、ホラズム語を意味する言葉で、「バクンド！」

と言った。そこで私は、彼に数切れのパンを差し出した。それを受取ると、彼は、

「通れ！ おれは汝らに憐れみを感じたのだ」

と言った。

§ 6. 彼 (イブン・ファドラーン) は語った。

彼ら (ズズ族) の一人が病気にかったとき、その人が女奴隷か下男を所有して

いるのであれば、その奴隷達が彼の世話をし、家族の唯一人として病人に近寄らない。彼らは彼らのユルトの一郭¹¹⁸に病人用のテントを張る。従って、病人はそのテントの中で死ぬが、病気が回復するまでの間、ずっとそこに放置される。

一方、「病気になる」当人が奴隷や貧乏人であれば、砂漠の中に投げすてられ、そのまま人々から見放されてしまうのである。

彼らの中の一人が死ぬと、彼らは、「先ず」家のような型をした大きな穴を掘る。次に死者に近づき、その死者にクルタク、腰帶と弓¹¹⁹をつける。さらにその手には酒の入った木杯をもたせ、正面には酒の入った木皿を供える。その間、[他の]人々は死者の「残した」金財産¹²⁰を運んできて、その家[即ち墓]の中に死者と一緒に葬む。家の中に死者を座らせると、家に墨根を付け、その上に粘土でつくった一種の円蓋に似たものを置く。次に彼らは「死者が生前に」所有していたすべての馬を連れてきて、100 乃至 200 頭、そして最後の一頭に至るまで殺して、その肉を食べる。なお、馬の頭、脚、皮と尾だけは取除いて、木に括りつけ¹²¹、

「これは彼が天国に乗って行く馬である」

と言う。もしその死者が「生前に、敵」人を殺したことがあるとか勇者であったならば、彼ら (トルコ人達) は、彼が殺した数だけの木製の像を彫刻して、それを墓前に供える。そして次の様に言う。

「これらは、天国で彼に仕える従士達である」

ときに、1 日か 2 日の間でも馬を生贄に捧げないで置くことがあると¹²²、彼ら一番の長老¹²³は、

「私は、夢の中である人、つまりありの死者を見た。そのとき彼は私に、“まことにあなた様もご承知でしょうが、私の仲間達は私を追いぬいて行ってしまいました。彼らと一緒にいて行くこうにも私は両足に潰瘍をおっていますので¹²⁴、とても追いつくことは出来ません。私は一人とり残されてしまったのです。”と 言っていた」

と言って、彼らに「生贄を早く捧げるように」勧告する¹²⁵。それを聞いて、彼らは早速、死者の「残した」馬のところに行き、それを殺して墓前に供える。すると、一兩日後になると、例の長老がやってくる、

「私は、ある人に出会った。そのとき彼は、“私の家族や仲間達にこうお伝え下さい。今や私は先きに行った人達に追いつき、その上¹²⁶すっかり疲労もなくなり ました。”と言っていたよ」と言う。

彼(イブン・ファドラーン)は語った。

トルコ人達は誰れでも口髭だけ残して、あご髭は抜きとってしまう。

ある時、私は彼らの一古老に会った。彼のあご髭は抜いてあったが、未だ幾分あごの下に残っている上、山羊皮の外套を着用していたので、遠くから彼を見れば、きつと山羊かと見誤ってしまうであらう。

fol. 202^a § 7. グズ・トルコ [族] の王はヤブグー Yabghu¹²⁷ と呼ばれている。つまりそれはアミールの称号にあたり、その部族¹²⁸ を統率する者はすべてこの名で呼ばれるのである。またその副官をクーザルキーンと言って、やはり彼らの首長を代理する人は、すべてクーザルキーンと名付けられているのである。

われわれは、そうした地域を運んだ後、アトラク・ブン・アル・カトガーン Atak b. al-Qaghan という彼らの軍指揮官のところに投宿した¹²⁹。彼はトルコ風のデントを用意して、われわれをそこに泊めてくれた。当時、彼は側近¹³⁰、侍従¹³¹ や多数のユルト¹³² を所有していた。

彼は、われわれに羊を贈り、数頭の馬を手配してくれた¹³³。われわれがその羊を潰し、馬は [今後の旅に] 乗っていくようにとの彼の計いであった。その上、彼は自分の家族といとこ達を招いて、彼らのためにと多数の羊を潰した。そこでわれわれは、彼に衣服、乾ぶどう、くるみ、胡椒と栗を贈呈した。

なお、私は元来は先父のものであった彼の妻に会った。彼女は、肉、乳とわれわれが先に彼に贈った品の一部を持ってデント¹³⁴を出ると、砂漠に行った。そして穴を掘ると、持ってきたものをその中に押しこんだ。次いで、何か言葉をつぶやいた。そこで私は通訳に、

「彼女は、何んと言っているのかね」

とたづねた。通訳は、

「彼女は、”これはアラビア人がアトラクの父カトガーンの為にと驚らした贈

物でございます”、と言っております」

と答えた。

夜になると、早速、私は通訳を連れだって彼のところに行った。丁度、彼はデントの中に座っていた。われわれは、ナジール・アル・ハラミー¹³⁵ がアトラクにイスラーム教を勧諭しようとした手紙を携えていった。彼 (ナジール) は、アトラクに沢山のムサイビーヤ貨幣¹³⁶の産る 50ディナール、麝香を 3 ミスカール (mithqal)、なめし皮、メルブ製の 2 枚の織布¹³⁷——それを使って、2 枚のクルタクを裁断して

やった——、なめし皮の長靴を 1 足、錦織の服 1 着、絹の服 5 着を [私を通じて] 贈った。われわれは [以上挙げた] ナジールからの贈物¹³⁷を彼に手渡し、その上、彼の妻には婦人用のヴェールと 1 箇の指輪を進呈した。私が彼のところまでその手紙を読むと、彼は通訳に、

「私は汝らが [使節の任を終えて] 帰ってくるまでは何とも答えられない。 [そのときにでも] 心に固く決めたことをスルタンに書面を以ってお知らせしよう」¹³⁸

と言った。

彼は前述した礼服を着るために、それまで身に着けていた錦織の服を脱いだ。見ると、彼がその服の下に着ていたクルタクは、すでに汚れて、ぼろぼろになっていた¹³⁹。なぜならば、彼らトルコ人の習慣として、誰でも自分の身に着けている服がぼろぼろに切れてしまうまでは、決して脱がないのである。

ところで彼は、あご髭と口髭をすべて抜きとっていたので、まるで宦官¹⁴⁰のようにみえた。

トルコ人達が、彼のことを彼ら一番の乗馬士であると言っているのを聞いた。ある日、以下の様な役を見た。彼はわれわれを馬に乗せて出かけた。丁度、一羽の雁が飛んで行った。すると、彼は馬をその雁の真下に御しながら弓を絞って射た。その瞬間、彼はそれを射落していた。

§ 8. 数日経過する間に、アトラクは上級の軍長官達、つまりトゥルハーン Turkhan, ヤナール Yanal と……, Bghiz¹⁴¹ に [われわれの件を] 上程した。彼 fol. 202^b らの中でも、びっこ、盲目、しかもいじけた手の持主トゥルハーンが最も身分高く、傑出した権力をもっていた。アトラクは、彼らに、

「そもそもこの者達は、私の娘の夫¹⁴²、アルミシュ・ブン・シルキー Almis b. Shilki¹⁴³ のところに行くアラブ王の使者達であります。私としては、あなた様方との協議なしには、彼らを勝手に出発させてしまう訳にはゆかぬもので

と向上した。すると、トゥルハーンは言った。

「このようなことは、全くわれわれが見たことも聞いたこともないことだ。われら並びにわれらの父親達が在って以来、スルタンの使節がわれわれのところを通ったことは、全く無かった。おそらく、スルタンは何か策略を企てて、こいつ等をハザルのところに差向け、彼らとぐるむになって、われわれに対して軍

事行動をおこすつもりだとしか考えられない。よって思うに、この使節の者達を真二つに切って、その所持品を没収すべきであらう」

すると別の者が、

「いや、彼らの所持品を取り、裸にしようべきではない。『そうすれば、』これまで来た所から再び引返さねばならなくなるだろうから」

と言うと、さらに別の者が、

「いやならぬ。そうしなければ、われわれはハザル王の囚れの身となるかもしれぬ。『われわれがハザルの捕虜になるんだったら』いっその事、こいつらにその肩代りをさせるため、ハザルに送還しようではないか」¹⁴⁰

と主張した。

彼らは、その問題で7日の間もめ続けた。一方、通過を許可すると議決され¹⁴¹、実際に通るまでわれわれは、ほとんど死に思っていた。

結局、トゥルハーンにメルブ製のハフターンとバーイパーフ貨幣2箇を、彼の家来各人にはクルタクを一枚づつ、さらにヤテールにも同じように贈物をした。そして「最後に」胡椒、粟と数切れのパンを与えると、彼らは立去って行った。

§ 9. 旅をつづけて、ついにユガンディ¹⁴² Yughandi¹⁴³ 河に達した。そこで【仲間の】者達はラクダでつくった【折畳み】舟¹⁴⁴ の荷を解いて広げ、それにトルコ産のラクダ【骨】で出来た取付け具をつけた。その船は円型なために、押広がるように船底にその器具を設けなければならぬのである。次いで衣類と生活用品を舟につめた¹⁴⁵。

その舟は一隻限り限度いっぱいに乗れば、5, 6人、【つまり】4人前後の人が一度に乗ることが出来る。手に白樺樹¹⁴⁶ の棒を持ち、それを丁度オールのように使いながら漕ぎつづけたと、水は回転しつづける船を運び（前に押しやり）、やがて河を渡る事が出来るのである。馬やラクダについては、どなり声を立てながら泳がせて渡らせる。

なお、キャラバン隊の渡河に先きだって、武器をもった兵隊が先ず渡る必要がある。なぜならば、その兵隊達は、キャラバン隊の人々が渡っている最中に奇襲を加えてくるバーシシュギルド族の恐怖¹⁴⁷にそなえての先鋒（前衛）となるのである。

かく説明したごとく、われわれはユガンディ¹⁴⁸ 河を渡った。その後、ジャーム Jam と呼ばれる河においても同じようにその舟を使って渡った。さらに、ジャーフシシュ Jakhsh, ウザル Udhul, アルドゥン Ardun, ワールシシュ Warsh, アフテ

イー Akhtu, ワブナー Wabna といづれも大きな河川を渡った。

§ 10. その後、われわれはバジャーク al-Bajanak 人【の住地】に達した。当時、彼らは海に似て水流のない水辺に設営していた¹⁴⁹。彼ら【の皮膚の色】は純褐色、髪は剃られていた。

fol. 203a

なお、10,000頭の馬と100,000匹の羊を所有している人をグズ族の中で見つけたことから考えると、彼らバジャーク人はグズ族とは異って、【奈匿】貧乏ということになる。

餌を捜す羊達の多くは、雪の中に居て、蹄を使って【雪を押分けながら】草をさがし求めていた¹⁵⁰。草を見つけて出すことが出来ないと、雪をかじって、異常なまでに肥える。ところが夏になって草を食べると、【却って】瘦せてしまう【と言う】。¹⁵¹

バジャーク人のところには、1日だけ留まり、さらに遠く旅をつづけていった。そしてそれまでに見たなかでも川幅、水流の激しさのいづれの点から言っても最大のジーフ Jikh 河の畔で野営した。その時、1艘の【折畳み】舟が河で転覆し、乗っていた人達が溺れたのを私は目撃した。しかも、多くの人達は行方不明となり、羊と馬の多くは溺死した。われわれの方も苦勞の末、やっとその河を渡った。さらに数日のあいだ進み、ジャハハ Jakha 河を渡り、さらにイルヒズ Irkhiz 河、バージャグ Bajagh, サムール Samur, カナール Kanah, スーフ Sukh 河、カンジャルー Kanjalu 河を渡っていった。

§ 11. そしてバーシシュギルド¹⁵² と呼ばれるトルコの一部族の国に立寄った。そこで、われわれは、彼らに強い警戒心を持った。つまり、彼らはトルコ人の中でも最も悪辣・不潔¹⁵³な民であって、他人に逢えば、その人の頭部をもぎ取り、体だけ残して頭を持去ってしまうといったごとく、【事あれば】少しの躊躇いもなく人を殺す【のが常な】のである。

彼らは髪を剃る。しらみは食べてしまう。彼らは互いにクルタクの縫い目を探し合ってしらみを歯でかむ。すでにイスラーム教徒に改宗していた彼らの一人が、われわれと一緒に居て、世話をしてくれたが、【あるとき】彼は自分の服にしらみがいるのを見つけたと、それを爪でつぶして、むしゃしゃ食べているのを私は目撃した。彼は私に気づくと、
「うまい！」

と言った。

彼らは何人も男根¹⁰⁰の大きさに合せて木片を彫り、それを男根に吊していた。彼らの一人が旅に出たいとき、あるいは仇敵に出合いたいと思ったときには、その木片に接吻して腰をかがめ、

「おおわが神よ！ しかじかのことを私にお叶え下さい」

と願う。そこで私は、通訳に、

「彼らの中の誰かにこうたづねなさい。『一体全体そのようなことをするのは、どういう訳なのか。つまり、何故、それを神とするのか、』と」

と言った。すると、その通訳は、

「実は、私も元来はこうしたことを行うところの出身なのですが、[当時の]私は、創造主¹⁰¹といえは、その神だけだと思っていますのです」

と返答した。また彼らの一人の主張によると、バーシュギルド人¹⁰²には12[種類]の神¹⁰³がいる、と。つまり、冬に神が宿っており、夏、雨、風、樹木、人間、水、夜、星、死[者]、大地[のそれぞれ]に神が宿っていると言うのである。なお、[彼らの考えによると]天にいる神こそが最高であって、ただ天の神はそうした神々と相互とりきめを結んでいるので、神達は各自その仲間達が行うことに満足している、と言う¹⁰⁴。[しかし、何と言っても]まことにアッラーフこそがその崇高さ、偉大さにおいて、この讃神者達の言う「いかなる神々」にも優っているのである¹⁰⁵。

fol. 203b また彼らの中で蛇を崇拝している集団¹⁰⁶、魚を崇拝している集団や鶴を崇拝している集団に私は出会った。つまり私に教えてくれたところによると、彼ら[鶴を崇拝している人達]は嘗て、ある敵の一族¹⁰⁷と戦いを交えて、それを打破った。それと言うのも、[戦いの時に]彼ら(敵)の背後で鶴が鳴き叫び、そのために敵は、それまで優勢であったにもかかわらず、驚愕して敗走したからである。そのことがあって、彼らは鶴を信仰するようになった、と。彼らは、

「それは、われわれの神である。なぜならば、われわれの敵を敗ってくれたのだ¹⁰⁸」

と言っていた。つまりそれが契機となって、実際に彼らは鶴を崇拝するようになったのである¹⁰⁹。

§ 12. 彼(イブン・ファドラーン)は語った。そして、その国を出発し、ジャラムシャーン Jaramshan 河、ウールン Ūrun 河、アウラム Awram 河、バーヤ

ナーフ Bāyānakh 河、ワティーン Watigh 河、ニヤースナ Niyasnāh 河、ジャーウシーズ Jawshez 河を越えた¹¹⁰。いま挙げた河と河との間は、2~3 日、あるいは4 日前後(の距離)であった。

- 90) qablat min al-arak (Turk).
 91) buyut sha'r. 此句の bayt は, qubba, 即ち〈テント〉の意。[註] 62 を看よ。
 92) wa-hum ma'a dhalika ka'l-humiri 'l-qallati. ほとんど類似の記事が本文のルース人に
 関する説明の中で繰返されている。恐らく, [IF] は, グズ・トルコ族のこととルース
 族で経験の事実とを一部混同していたのではないだろうか。[Y], [Q] らが, グズ・ト
 ルコ族に関する [IF] の情報を全く引用していないのは, その為と考えられる。[註]
 118, 335 を看よ。
 93) コーラン, XLII 36 に, 「主の喚びかけにこころよくお応え申し, 礼拝の務めをよく果し,
 どんなことも互いによく相談し合ひ, 我らの授けた目々の糧を惜しみなく施す人々」
 とある。
 94) 写本の bi'l-lahi bi'l-wahidi は, Allah al-wahid と改めるべきであろう。
 95) janibat.
 96) 同じ記事は, 本文の「ルース族について」の記載中に再び見える。[註] 92, 348 を参
 照のこと。
 97) wa laysa bayna-hum wa bayna 'l-mā'i 'amalun khaṣṣatan fi 'l-shi'a'i.
 98) 写本には, alladhi yushyalt-hima (?) とあって文意が明らかでない。[ZV], text 11 は,
 これを alladhi shadda ilay-hima と改め, 本訳もこれに依っている。[C], 69 n. 110 は,
 alladhi nushshila ilay-hima (2 本の木に固定されていた人) と読んだ。
 99) 写本の wa sumi'a-ni qur'anun は, wa sumi'a-ni [sura'u] qur'anun とカッコ内の字
 を補う必要がある。
 100) rabb. [註] 87 を看よ。
 101) ba'ḍa ḥarami-hi anā は, [ZV], text 11 が ba'ḍa ḥarami-hi innā と推したように改
 める。[Cz], 238, [K], 182 n. 193 参照。
 102) fa-idha wafā-hu ḥamala-ha ilay-hi は, [ZV], 22 n. 2 に従い, fa-idha wafāqa-hu
 と改める。ḥamala の主語は, 〈娘の父親〉, ha は〈娘〉であって, 「娘の父親は, 娘を相
 手(婿)のもとに連れて行く」の意となる。[Cz], 238-9 参照。
 103) al-mahr.
 104) 写本には, hadha yuridu an yushara-nā li-annahu qad tagharrasa fi al-mā'i とあるが,
 [R], 239 と [K], 183 n. 200 に依って, hadha yuridu an yushara-nā li-annahu qad
 tafarrasa と改める。[Cz], 239, [D], 94 n. 1 参照。[ZV], 22-3 は, この部分を Dieser
 will uns belixen, denn er tauchte in Wasser unter と訳した。
 105) jawars. ペルシア語の gāwars.
 106) qubba. [註] 62 を看よ。
 107) 写本の al-rajul (?) は, al-rajl と改める。
 108) 写本の本文には ss'ala 'an thulthi-hi (?) ayna huwa とあって, 解釈し難い。[ZV], 24

n. 2 は, ss'ala 'an ss'isi-hi (彼の従者について問い質す), [Cz], 239 は, ss'ala 'an
 faluti-hi (相手の逃亡のことについて尋ねる)と解しているが, いづれもはっきりにしな
 い。此題は, [D], 96 の推定通りに, ss'ala 'an biladi-hi を採る (しかし写本からは,
 決して bilad-hu とは読めない。むしろ 'an baladi-hi の方が適当)。

- 109) sabl.
 110) nabdh. [IF] は, 本文中で〈酒〉の意として nabdh という語だけを用いている。
 111) hayy.
 112) 写本の fi-ma は, fa-lamma と改める。
 113) すなわち, 使節がトルコの地域を通過してサカーリバの国に行くこと。
 114) Muqaddas, 323 には al-baylaf とある。
 115) buyut (bayt) とあるが〈テント〉の意であろう。[註] 62 参照。
 116) brr. または〈善行〉を意味する。
 117) ana akhra'u 'ala libyati Kudharkin. khari'ya (kharay) は〈策をする〉の意。
 118) yaḍribuna la-hu khaymat nahiyat min al-buyut. buyut (bayt) は, 彼らトルコ人の
 〈エルト〉の意と解すべきであろう。nahiyat は, 〈一郭〉の意であるが, おそらく, 病
 人用のテント (khayma) は, 彼らのエルトから少し離れた場所に張られたのであろう。
 此の節節に見られる記事は, 本文の「ルース族について」の説明の中で再び現われる。
 そこでは, qarabn la-hu khaymatan nahiyatan 'an-hum (彼らは, 彼らのところから
 離れた一郭の地に, 病人のためのテントを張る) とある。[註] 348, 併せて [註] 92 を
 看よ。
 119) wa qawsh-hu に次いで, 写本には一語に相当する空白があるが復原困難。
 120) 'ala qadri kuthrati-hu. 'ala qadri... なる言い方は, [IF] が本文中で度々用いており,
 la nalwi 'ala shay'in と共に彼の筆法を示す特色の一つと言えよう ([註] 17, 156, 304 参
 照)。例えば, 'ala qadri 'l-iḥḍi, 'ala qadri 'l-walimati, 'ala qadri mali zawj-ha など。
 121) 類似の記事が「ルース族について」の文中に見えている。[註] 347 及び 92, 118 を
 看よ。
 122) 写本の wa-ribbama taghafalu 'ala qat' al-dawabb は, ...taghafalu 'an qat... と改め
 るべきであろう。
 123) shaykh min kibari-him
 124) 写本には, shafaqat rijāya (?) とあって, いかなる意味か明確でない。[K], 188 n. 255
 と [D], 100 は, shuqqiqat rijā-ya (私の両足は裂かれた) と推したが, 本訳は [Cz],
 240-1 の脱 sha'ifat rijā-ya を採った。sha'ifa は, 〈病氣になる (とくにラクダについ
 て)〉の意であるから本文は, 「私の両足は悪い(傷をおう)」の訳となる。
 125) fa ḥata-hum (?) とあるが, [ZV], text 14 は, fa ḥaththa-hum, [D], 100 は, fa
 yaḥaththu-hum と改めた。訳文は [D] による。
 126) 写本には, laḥiqu-hum man taqaddama-ni とあるが, 前後の文脈から考えて hum は

不必要。

- 127) I. Khuradhdhah, 40 の配字 Jabghuwiya.
128) qabla.
129) 写本には thumma nazalna 'an-hu iriṭṭal-nā min nabhiyati hā'ulā'i ṣāḥib jaysh-hum とあるが, [ZV], text 15 が改めたように, nazalna ba'da iriṭṭal-nā min nabhiyati hā'ulā'i 'inda (bi) ṣāḥib jaysh-him と読んだ。
130) ṣunbat (?) は, [ZV], 28 n. 2 に従って ḥabnat (ḥabnat) と改める。Lisān, XIII 252 参照。
131) ḥashiya, Dozy, I 293 参照。
132) buyt kabrat, buyt (bayt) は〈ユルト〉の意と思われる。[註] 118 を参照。
133) 写本には, wa qādu dawabha とあるが, dawabbi は二段変化であるから誤。此処は wa qāda dawabha と改める。このように基本的な文法上の誤りが写本の箇所で見られるのは, 写字生がアラビア語にあまり習熟していなかったことを示している。
134) buyt (bayt).
135) 写本には Nadhir al-Ḥaramin とあるが, al-Ḥarami と改める。
136) wa-thawbayni (thawbāni) Marwiyat wa-qāṭa'na la-hu min-hum qurṭaqayni. [D] 102 は, 此処を thiyabun Marwiyatun wa qāṭa'na la-hu min-ha qurṭaqayni (マルブ製の【数枚の】織布…) と改めているが, 写本では, 明確に min-hum と読めるから, このような修正は依るべきでない。
137) fa dafa'na ilay-hi hadiyat-hu. 本訳では, ilay-hi の hu を〈アトラク〉に, hadiyat-hu を先きに列挙された〈ナディールの贈物〉の意と解した。[C] 78, n. 146 は, hadiyat-hu は〈ナディールの贈物〉ではなく, 〈使節の贈物〉と考えた。
138) この一文から推して, 使節一行の復路は, 往きと同じ道筋を通ったとも考えられる。[註] 1, 153 を看よ。
139) [ZV], text 16 は, tatūqṭi'ā'u wasakhan と改めたが, 写本通りに wa-qad taqṭi'ā'a wasakhan と読むべきであろう。[Cz], 240, [D], 103 参照。
140) al-khadim.
141) 写本の一部に汚点があって, 判読が難しい。[ZV], 30 n. 5 は, Turkhan wa Ymal wa ibn khatani-hi(または wa-huwa ibn khatani-hi) wa yghiz (?) と推した。[D], 103 には,wa ibn akht-hima wa ilghiz (彼ら 2 人の従兄弟とイルギズ) とある。
142) ṣihr. は, 〈婿〉, 〈妻の兄弟〉, 〈娘の夫〉, 〈義理の父〉などの意がある(Kaziminski, I 1380)。此処は, アトラクの娘をブルガル王に嫁がせたことを意味している。つまり, ハザル勢力に対抗するために, グズ・トルコとブルガル国とは婚姻関係を結んでいたと考えられる。[ZV], 31, n. 1 は, これを Schwiegervater と訳した。[C], 79 n. 150, [K], 189 n. 280 参照。
143) 先きには, Almiş b. Yalṭwār とあった。[註] 3 を看よ。
144) fa-nab'athu bi-ha'ulā'i nufadāt ulā'ika とある。字義通りに訳せば, 「われわれはこれら

を送って, 彼らをそれらにささげる」となる。つまり, 「捕虜として買代りさせるために, こいつら使節の着違をハザルに送付する」の意。

- 145) 写本の ajma'a da'bu-hum は, [D], 104 に従って ajma'a ra'yu-hum と改める。
146) 写本には Baghandi とある。
147) sufar. すなわちジュルジャーニーヤを出発するときに買ったもの。[註] 69 を看よ。
148) 此処の写本の本文は, 難解である。wa akhadhu bi'l-athathi(写本では bi'l-inath) min al-jinali 'l-turkiya li-annah mudawwaratun fa-ja'lu-ha fi jawfi-ha ḥatta tamadda と読んだ。写本通りに inath (untha 〈雄ラクダ〉) と採ると, この箇所の文は全く解釈できない。[K], 190 n. 295 は akhadhu bi-inathi 'l-jimali, [C], 81 n. 154 は, arsan al-jinal (ラクダの鼻索), もしくは aqṭab al-jimal (ラクダの荷鞍) のいずれかの意と推した。[ZV], 31 n. 3; [D], 105 n. 1 参照。
149) khashab al-khadhank.
150) 写本には, li-yakṭun tal'atan li'l-nasi khalfah (?) min li'l-Bashghird とあって, 一部の判読が難しい。[ZV], 32 n. 2 は,khalfat li'l-Bashghird (後続の人々のため) に, パーシユギルド族に対するの副衛隊が組織される)と考えたが, 訳文は [K], 109 の khfat min al-Bashghird を採った。
151) 此処の写本には汚点があって判読が難しい。[D], 106 に依って, hum nuzulun 'ala とする。
152) この部分は tabḥathu bi-aḥlāḥ-ha taḥlūbu 'l-bashish と読んだ。[C], 83 には tanahḥat (tanahja 〈わきへどける〉の意) とある。
153) [AT] ([ZV] 33 n. 6) には, 此箇所は次の様に引用されている「Bajmak は, トルコの一族族であって, 多数の羊を所有している。そこ [の地方] では, 大雪が降る。al-Muqtadir bi'llah の使者として, そこを訪れた人が語ったところによると, そこでは羊を食って, その尾を地面に引摺る [程に肥える]」。なお, 此処の記事から, イブン・ファドラーソン一行は, 夏期にバジャーナクの地を通過して帰還したと考えられる。[註] 1, 及び 138 を看よ。
154) 写本の本文に続く文, つまりパーシユギルド族に関する記事は, [Y], I 468-69 (Bashghird), [Q], 609-10 (Bashghirt) に引用されている。
155) [Y], I 468 には aqdar (強力) とある。[ZV], 35 n. 2 参照。なお [Q], 609-10 には, この部分は「われわれは, トルコの一部族の国 (Bashghirt) に着いた。われわれは, 彼らがトルコ人の中で最も勇猛, 強大で傍若無人に人を殺すことを知った」とある。
156) 'ala qadri 'l-ighli. [Y], I 469 は, これを 'ala qadri 'l-ikhli (王冠) と改めた。'ala qadr については [註] 120 参照。
157) khaliq. [Y], I 469 には mujid とある。
158) [Q], 610 は, 〈天の神〉 (li'l-samā' rabbun) を含めて, 14 種類の神を挙げている。rabb については, [註] 87 を看よ。
159) [AR] ([K], 156) は, 〈ハザル国の説明〉という項目の中で, 写本の本文の記事と合致

する一文を載す。すなわち「彼ら（ハザル族）の王が 40 才を過ぎると、彼を退位させる。彼らは、日、夜、風、大地、空のそれぞれを神性が宿るものとして崇拜している。しかし、それらの中でも空(天)の神は他の神よりも偉大である」とある。王の在位期間が 40 年であることの説明は [IF] のハザル国の記事を、宗教に關しては、パーシェグルド族の部分からの引用であって、[AR] は誤って同記事を同じ箇所記したことが知られる。

160) コーラン, XVII 45 に「なんと恐れ多いことか。あの者どもの言っているようなものとは比較にもならぬ高みにいます御神なのに」とある。

161) *qā'ifa*.

162) 写本には *aqwaman* とあるが, *qawman* の誤。

163) 写本には「これは…彼はわれわれの敵を敗った」とあって、点線の部分の判読が難しい。訳文は [Y], I 469 に依った。

164) [Q], 610 が引用した箇所を釈出してみると、次の通りである。「彼 (Ibn Fadlan) は鶴を崇拜している部族 (*qawm*) について見聞したことを次の様に報告した。[彼らの一人が 13 種類の神を述べたので] 私は “これはまことに驚いたことだ” と言って、さらに彼らがどうして鶴を崇拜するのか、と尋ねた。すると彼らは、“われわれは嘗て、われわれの敵部族と戦いを交えた。[一度は] 彼らはわれわれを敗ったのだが、彼らの背後で鶴が鳴いたために、その声をわれわれの奇襲だと勘違いしたのだ。そこで、彼らは敗走し、われわれは彼らに再攻撃をかけることになった。つまり鶴がわれわれの敵を打破ったことが理由で、それを信仰しているのである” と説明した。」

165) 此処の河川名は, [D] 110 に依って読んだ。写本からは *Jarnsan*, *Awan*, *Avram*, *Yubnai*, *Wai'*, *Banasnah*, *Jawshim* と読める。AWRM(Urem) は *Mas'udi*, *Tanbih* 64 の *Awn* と同じ(?)。なお, [Y] には、これらの河の名は一つも見られない。

IV サカーリバ国について

§ 1. めざす¹⁶⁰ サカーリバの王の王のところから隔たること一昼夜のところにいたとき、王はわれわれを歓迎するために臣下の四王侯¹⁶¹、兄弟並びに息子達を差しむけた。彼らは、パン、肉や粟をもって来て、われわれの労をなぐさめ、[王のところにまで] 護衛してくれた。

王 [のところ] から 2 ファルサフのところを遡進でいたとき、彼自らがわれわれを出迎えた。彼は、われわれの姿を認めるや、馬から降りて、偉大なるアッラーフへの崇拜・礼讃をこめて顔を地面につけた。次いで、王は袖の中に入れていたディルハム貨幣をわれわれに向って、ばら蒔いた。彼は、われわれのためにテントを用意してくれたので、われわれはそこに身を落着けることになった¹⁶²。

彼のもとに到着したのは、[ヒジュラ暦] 310 年、ムハッラム月の第 12 夜、日曜日のことであつた¹⁶³。実にジュルジャーニーヤを出てから彼の国に着くまでの通行距離は 70 日間を要した¹⁶⁴。

われわれは、王侯、軍指揮官や国民達が「われわれの行う」書簡の朗読を公聽するために集まるまでの間¹⁶⁵、日曜、月、火、水曜日 [の 4 日間] を用意されたテントの中に留っていた。

さて、木曜日になって、彼らが集まったとき、早速、われわれは持参してきた 2 本の旗をかかげ、王に贈った鞍¹⁶⁶を [王の] 馬につけ、彼に黒服を着付け、ターバンを巻くのを手伝った。それに、

その後、私はカリフの書簡を取出して、彼に、

「この書簡が読上げられている間は、座ってはいはならないのです」
と言った。そこで彼は列席している国の高位高官達¹⁶⁷と一緒に立上った。ところで彼は大変に肥り、腹が出ている人であつた。

私¹⁶⁸は開始した。書簡の冒頭の部分を読み [終えて]、*☆*に平安あれ。唯一なる神、アッラーフの恩恵を汝にお与え下さるよう」の部分に差し加かったので、私は、

「敬虔信徒の長にサラームの答辞を！」

と言った。すると彼は、彼ら全員と共にサラーム [の答辞] を行った。その間、通訳は「その書簡を」われわれのために一語一句通訳していった。

かくして、その朗読を終えると、彼らは大地が振動する程の「大声で」タクビールを絶唱した。引きつづき私は、ワジール、ハーミッド・ブン・アル・アッバース Hamid b. al-'Abbas の書簡を讀上げた。その間、王は立ちつづけていたの、私は彼に盛るようにと促がした。彼は、ナジール・アル・ハラミーの書簡が朗読されているときになって座った。

fol. 204a 私がその「ナジールの」書簡を讀み終えると、彼の側近達は彼に向って多量のディルハム貨幣をばら蒔いた。その後、私は王および彼の妻への贈物として、香料、衣類と真珠を取出して、一つ残らず次々に2人に手渡していった。さらに、人々がいる前で彼の妻に礼服を贈った¹⁷⁹。そのとき彼女は王の脇に座を占めていた。なぜならば、このように「妻が王の脇に」座することは彼らの作法・慣例¹⁷⁹になっていたのである。私が彼女にそれを贈ると、女達は彼女にディルハム貨幣を蒔いた。[それがすむと]われわれは引揚げた。

§ 2. しばらくたった後、王の来るようにとの言葉に、われわれは彼のもとに赴いた。その時、彼は自分のテントの中に居て、諸王侯を彼の右側¹⁸⁰に留めていた。彼は、われわれに彼の左側に座するようにと命じた。一方¹⁸⁰、彼の息子達は彼の前に座っていた。なお、彼だけがルーム製の錦織で覆布した玉座の上にいた。

彼が食卓を持って来るよう命じると、焼肉だけがのせられた食卓が運ばれてきた。彼は先ず自らのナイフを取り、一口の肉片に切って食べた。次いで2切れ、3切れと。その後で彼は「カリフの」使者スーサンに与える肉片を切った。スーサンがその肉片を受取ると、小型の食卓がスーサンに運ばれてきて、前に置かれた。

この様に行うことが「彼らの」慣例なのである。つまり、王自らが一口の料理を人に給仕するまでは、何人といえども、決して料理に手をつけない。そして、相手がその一口を受取ると、そこではじめて食卓が運ばれるのである。

次に王は「別の肉片を切って」私に渡した。[私がその一口を受取ると]私に一つの「小型」食卓が運ばれた。さらに王は「臣下の」四王侯に「次々に」与え、[彼らにそれぞれ]食卓が運ばれた¹⁷⁹。次に王は彼の息子達に「肉片を切って」与え、同じく彼らにも「小型の」食卓が運ばれた。

このようにして、われわれは誰一人として王と「同じ」食卓につくことなく、また王以外の食卓の料理を受取ることなくして、われわれ「全員」は王の食卓のものを食べたのである¹⁷⁹。食事がすむと、彼らは各自その食卓に残ったものを家に運んでいった¹⁸⁰。さらに、われわれが食事をし「終え」たとき、王は蜂蜜酒——彼

らはそれをサジュー al-sajū と呼んでおり、一昼夜「の間、酷して」つくる¹⁸¹——を持って来させた。彼は、それを一口飲んでから立上り、

「これぞが主、敬虔信徒の長への私の喜びのしるし。アッラーフよ！彼の御寿命を長からしめたまえ」

と言った。王が起立すると、四王侯並びに王の息子達は立ちあがった。そこで、われわれの方も立った。結局、彼はそうしたことを3度に渡っておこなった。その後、われわれは彼のもとを立去った。

§ 3. 私が「サカーリバの国に」到着する以前から既に王の説教壇においては、《おお神よ！ブルガール王ことヤルトワール王に安寧あらんことを》と唱える王のためのフトッパが行われていた。そこで私は、三に、

「そもそも「説教壇で」国王 (malik) といった場合、それは神 (アッラーフ) のことを指しているのです¹⁸²。説教壇では、いと高き・偉大なるアッラーフ以外にはその言葉で呼ばないのです。このことはあなたの主君であられる敬虔信徒の長でさえ、東西「諸国」の説教壇においては、《おお神よ！あなた様の下僕、あなた様の後継者、ジャファル・アル・イマーム・アル・ムクタディル・ビッラーフ ja'far al-Imam al-Muqadir bi'llah なる敬虔信徒の長に安寧をお与え下さい》と、唱えられることで満足されておられるのです。そして彼の先祖の父のカリフ達についても同様であられました。嘗て、予言者——アッラーフよ彼のの上に恵みと救いがあらんことを——は次の様に言われました。「キリスト教徒達がマルヤムの子イエスに対して行うのと同じようにわれを讃美してはならぬぞ。なぜならば、われは、ただアッラーフの下僕・使徒にすぎぬのだからな」と¹⁸³」

と言った。すると王は、私に、

「では、私に対するフトッパはどの様にすれば良いのだ」

とたづねた。私は、

「あなたの御名、あなたの父上の御名にもとづいてです」

と答えると、彼は、次の様に言った。

「実は、私の父は異教徒だったのだ。したがって、私は彼の名を説教壇に刻みたくないのだ。また私についても然りだ。だから私の名を刻むのはどうも。なぜならば、私の名を唱える人達が、「これまた」異教徒なのは。ところで、私の主君であられる敬虔信徒の長の御名は何と言うのかね」

そこで私は、

「ジッファル Ja'far です」

と答えると、彼は

「それでは、その御名で呼ばしても構いませんわねどうか」

とたづねた。私は、言った。

「結構です」

次に彼は、

「では私の名はジッファルに、私の父の名をアブド・アッラーフ 'Abd Allah と
きめた。その旨をハティープ¹⁸⁰に伝えてくれ」

と言った。そこで私は彼の言う通りにした。かくして彼に對するフトッパは、《お
お紳よ！ あなたの下僕ジッファル・ブン・アブド・アッラーフなる敬虔信徒の長
のマウラー、ブルガールのアミールに安寧をお与え下さい》と唱えることになった
のである。

§ 4. 書簡¹⁸⁰の朗読と贈物の授与の3日後、王は私に使いを差しむけてきた。彼
お、4,000 ディナールの問題、つまりありキリスト教徒 (al-Faql b. Musa) の誹計
によって、その金 [を玉に渡すこと] が延び延びになってしまったことは、すでに
王の耳に達していた。なぜならば、その知らせは [カリフの] 書簡の中に記されて
いたのである。

私が彼のところに入って行くと、座るようにとの言葉に、私は腰をおろした。彼
は私のそばに敬虔信徒の長の書簡を置いて、

「この手紙をもってきたのは誰か」

とたづねた。私が、自分でであると答えると、次にワジールの書簡を取出して、

「そして、これもか」

と言った。私は、

「私です」

と答えた。彼は、

「それならば、この両手紙に記されている金はどうしたのだ」

と、たづねた。私は次の様に返答した。

「時間が足りませんでしたので、どうしてもそれを徴収することが出来ません
でした。つまり入国の時期を逸してしまうのを懸念して、私達は彼 (al-Faql
b. Musa) があとで追いついてくれるものと思い¹⁸⁰、残してきたのです」

すると彼は、

「しかし、かく言う汝はすべて一緒に到着したではないか。わが主君は、そ
の金を私のところに驚らして、私を今まで抑圧してきたあのユダヤ人¹⁸⁰からわ
が身を守る要薬を築くために費されるべきものを、代って汝らに支払ってしま
ったのも同然だ。一方、下賜の品々については、私の従士¹⁸⁰が間違いない持っ
てきているのだ」

と言った。私は、

「全くその通りです。しかし私としても出来得る限りのことはしました」

と説明すると、彼は通訳に向って、

「彼にこう言え。“その者達に言ってもはじまらぬ。ただ問題になるのは、お
まえだけなのだ。なぜならば、その者達は非アラブ人だ¹⁸⁰からな。もしも御師
¹⁸⁰——アッラーフよ！ 彼に権勢をお与え下さい——が、はじめからその者達
も汝も同じようにたよりにならないことをご承知だったなら、私のところに[金
を] 無事とどけさせるために¹⁸⁰、また私 [宛のカリフ]の書簡を朗読させ、私
の返事受聴の任のために汝を遣わすことはしなかっただろう。したがって、私
は汝以外の者にはディルハム貨幣を要求しないのだ。さあ、その金を出しな
さい。それが汝の身の為が一番良いことなのだから、”と」

と言った。ただ茫然自失・憂鬱な思いで、私は彼の前から引きさった。彼の [実
に] 立派な風貌、威厳高く、でっぷり肥った様はまるで大樽が語りかけているかの
ようであった¹⁸⁰。彼のところから出ると、私は仲間を集めて、王との間におこった
事柄について報告した。[そして最後に] 私は、

「この件については、[言葉]を慎むように」

と言った。

§ 5. 王のムアッジャインは、礼拝を行うとき、イカーマ iqama [の後のアザーンの
唱句] を2回唱えていた¹⁸⁰。そこで私は、王に、

「そもそもあなたの主君であられる敬虔信徒の長は、国ではイカーマの唱句を
ただ1回だけ唱えることにしておられます¹⁸⁰」

と忠告した。すると彼はムアッジャインに、

「言われた通りにやりなさい。違えるでないぞ」

と言った。そこで、そのムアッジャインは、数日の間、その言葉通りにイカーマの唱
句を唱えた。その間も王は、例の金のことを問題にしたので、ついには私と言合

いになってしまった。私は、この点についてはどうすることも出来ずに、[ただひたすら]弁解に努めた。一方、彼は自暴自棄になってムアッジャインに[従来通り]イカーマの唱句を2回唱えるようにと指示した。そこで、ムアッジャインは、その指示通りに行った。それによって、さらに彼は私との議論を続けようとしていたのである¹⁹⁹。

ムアッジャインがイカーマの唱句を2回くりかえしているのを聞いて、私は大声を出してやめさせた。王は、それを知って、仲間と共に私を呼び出した。われわれ一同が集まると、王は通訳に次の様に言った。

「彼——即ち私（イブン・ファドラーン）のこと¹⁹⁹——にこう言え。つまり2人のムアッジャインがいて、その一方はイカーマの唱句を1回唱え、他方は2回唱えたとする。その両者が[各自の参列]者と共に行なう礼拝は合法か否か、とな」

私は、
「その礼拝は合法でございます」
と答えた。すると王は
「[それは]個々の意見¹⁹⁹によってか、多数意見の一致¹⁹⁹によってか」

とたづねたので、私は、
「多数意見の一致によって」
と答えた。次いで、王は、
「彼にたづねよ。弱勢で包囲され、隷属下におかれた人々¹⁹⁹のためにと金のあるグループ²⁰⁰に委託されたお方が²⁰¹いて、彼ら[グループの者達]がその方を欺したとしたらどうだ、とな」

そこで私は返答した。

「それらの者達が不徳な者と言えども、決してそれは許されぬことです」
「個人意見によってか、一致によって[言うの]か」
と彼は、たづねた。私は言った。

「一致によってです」
さらに彼は通訳に向って、
「彼にこうたづねよ。カリフ——アッラーフよ！ 彼のご存命を長からしめよ——が私に向けて軍隊を派遣したら、私を力づくで支配すると思うか、とな」

と言ったので、私は、
「いいえ、そんなことはありません」

と答えると、

「では、ホラーサーンのアミールは²⁰²」

とたづねた。私は、

「ありません」

と言った。彼は、

「イスラームの国々から」距離を隔てている上、われわれの間にいる多数の異教の民によって、[そのような目に逢うことは]ないだろうか」

とたづねたので、私は、

「ない」

と答えた。[最後に]彼は[通訳に]、

「彼にこう伝えよ。"まことに、汝も承知の通り、ここは遠方の地にある。しかし、私はわが主君なる敬虔信徒の長に深く威服している。が、実を言うと、私に係わることで何かカリフの怒りに触れるようなことが報告されて、それがもつてカリフが私をとがめたり、私の土地を破壊したりしないかと危惧しているのだ。カリフは御自らの帝国を治め、私との間には広大な国々が介在していると言っても。しかる上に、汝らと言え、汝らはカリフと寝食を共にし²⁰³、常にカリフにお目にかかっている。にもかかわらず、汝らは、私と私の弱勢の民のためを思いついて[カリフが]遣わされたその使節の途において、カリフを裏切ったのだ。つまり汝らはイスラーム教徒[すべて]を欺いたことになるのだ。真輦に私と語ってくれる者が来てるまでは、私の宗教的事柄について、決して汝らの干渉を受けぬ。かかる態度をもった者が私のところに来れば、その人にしたがおう、と」

と言って、口を封じたので、われわれは何も返答することが出来ずに、その場を去った。

彼（イブン・ファドラーン）は語った。その論議のあと、王は私の仲間を斥けておいて、恩情を感じたのか、好意の念をもって、私を

「アブー・バクル・アル・シッディーク Abu Bakr al-Šiddiq !」²⁰⁴

と呼んだ。

fol. 205 b § 6. 私は²⁰⁵、彼の国内において、数知れぬ程の驚嘆すべきことを見聞した。その一つ。その国に到着した第一日目、日没まえの一時²⁰⁶を真紅に染まった空のあなたを見ていた。すると、空中で猛烈な響きとかん高い呻き声を聞いた。頭をあ

げると、まさに火のような赤い雲が私の真近にあって、呻き声と音響は、その雲の間から漏れていた。しかもその雲の中には人間と馬のようなものが居り、その中の人間らしき像には、私がまさにそうだと断定出来る程はつきりと槍と刀が認められた²⁹⁷。さらにそれと類似した別の一群²⁹⁸があって、やはりその中にも人間と馬と武器とが認められた。次に、丁度、騎馬大隊が「別の」大隊を攻撃するかのよう、その一群は、他方の一群を襲撃しはじめた。われわれ一同は、そのことに驚愕し、ただひたすら祈願・祈禱をくりかえした。

一方、その間「様子を見ていた」彼らは、われわれを笑い、われわれの様子にただあきれ返っていた。

彼（イブン・ファドラーン）は語った。

われわれは、一群が他の一群を攻撃し、次の瞬間には両者共に混合・分解していく様子をながめていた。しかもそうした現象は夜間しばらく²⁹⁹つづいてから消滅した。われわれがそのことを王にたづねたところ、王は先祖から言いつたえられたきた次の様な話を語った。つまり、それらはイスラーム教を信奉する数少ない異教徒のジンであって、毎夕、彼らは抗争しあうのである。しかも、彼ら両者が存在して以来というものの毎夜そうしつづけているのである、と。

§ 7. 彼（イブン・ファドラーン）は語った。

私は、もとバグダードの人で、図らずもこの「サカーリバの」地に来て³⁰⁰、今は王の仕立屋をやっている人と懇談するために、一緒に私のテントに入った。われわれは、夜（al-'atama）³⁰¹のアザーンを待つ間、人が「丁度コーラン全体の」7分の1の半分（14分の1）足らず³⁰²を朗読し終る程度の時間を話合っていた。とその時、アザーンのよびかけがあった。そこでわれわれはテントから飛びでたところ、すでに曙光が見えた。私は、ムアッジンに、

「一体、汝はどのアザーンのよびかけを行っているのか」

と、たづねた。すると彼は、

「明け方（al-fajr）のアザーンです」

と答えた。私は、

「では、夜の礼拝は」

と、きいた。すると、彼は次のように答えた。

「私達は、それを日没の礼拝（al-maghrib）と一緒に行います」

「では、夜は[どうした]」³⁰³

と、私はたづねた。彼は、

「あなたが御経験なされた通りです。夜はすでに長くなりはじめたとは言っても、以前はこれよりも短かったです³⁰⁴」

と言って、さらに次の様な説明をした。つまり彼はこの一カ月来、明け方の礼拝をやりにこれくらいと心配で眠れなかったこと、なぜならば、「この地方の」人々が、日没の礼拝のときに料理なべを火にかけておいても、その料理が未だ充分に煮あがらない内に明け方の礼拝（al-ghadit）になってしまふのである³⁰⁵。

彼（イブン・ファドラーン）は語った。

彼らのところでは、昼間が非常に長いことを私は知った。つまり、彼らの住む地方では、一年の内の内のある期間は昼間が長く、夜が短く、つづいて夜が長くなって、昼が短くなるのである。

「この地に到着して」2日目の夜、私はテントの外で腰をおろして、空をながめていたが、空にはほんの15 箇程度と思われるわずかな数の星しか見えなかった。しかも「夜間」人は互いに相手「の姿」を矢のほどく距離よりもずっと速くから識別出来る程度のうす暗さであった³⁰⁶。

彼（イブン・ファドラーン）は語った。

私は、「この地で」月を見たが、月は中天にのぼらず、しばらくの間、空の一端にのぼった後、もう曙光があらわれて、月は消えてしまった。

王が私に語ったところによると、彼の国の先き3 カ月旅程のところには、ウィースー Wīṣū³⁰⁷ と呼ばれる一部族が住み、そこでは夜「の長さ」は1 時間にも満たない、と言う。

彼は（イブン・ファドラーン）は語った。

また私は、その国で太陽がのぼるとき、次の様なことを見た。「日出時には」その国のすべてのもの、「つまり」地面や山々、人の目にふれるすべてが紅に染まり、太陽はまるで巨大な動物の口輪³⁰⁸のように登り、しかもその紅は、太陽が天頂の高さに達するまで³⁰⁹そのまま残存していた。その国の人が私に教えてくれたところによると、冬になると、夜は「今の」星の長さにもどり、星は「今の」夜の長さになると。そして「もしも」われわれの中の誰かが日出時に、今、われわれがいる場所からわずか1 フェルサフ足らずの距離をへだてたところにあるアティル Atil という地点³¹⁰に向かって出発したとすると、そこに到着する頃には薄暮時になって、星が全天を覆ってしまう、と。われわれがその国をあとにしたのは、まさに夜が長くなり、星が短くなってからのことであった³¹¹。

§ 8. 彼らは犬（狼）の吠声を非常な吉兆と考えているようである。彼らは「狼がなくなると」収穫豊饒、幸福・平和な年である²³⁷²と喜んで喜ぶのである。

彼らの地方には、蛇が大変多く、樹木の枝に 10 匹²³³ 以上もぐろを巻いているのを私は見た。

彼らは蛇を殺さず、蛇の方も人に危害を加えることはない。事実、私は、ある場所まで長さ 100 ザラー以上もある大きな樹木を見ていた。すでにその木は倒れていたが、実にその幹は巨大だったので、私は立留って、じっとながめていた。すると、その幹が突然に動き出した。驚いてよく見ると、その上には太さといい、長さもいい、まさにその幹程もある蛇がいた。蛇は私に気付くと、そこから降りて樹木の中に消えていった。私は驚いて帰り、「そのことを」王とその側近の人々に語った。が、彼らはそのことに格別何んの関心も示さなかった。王は、

「別に心配なされるな。汝に危害を加えるようなことはないのだから」

と言った。

われわれ²³⁴¹は王と一緒にある場所に宿営した。私は仲間のテギーン、スーサン、パーリス²³⁴²と、それに王の家来を一人つれて樹林の中に入った。その時、私は、小さく、緑色の、つむ糸棒にも似て細長い樹枝を見つけた²³⁴³。その茎の先端²³⁴⁴にあった部分は緑色で、地面に薄く、幅広く、べったりと広がり、しかもまるで草の様なものがその上を覆っていた。その樹枝には、種子²³⁴⁵がついており、その実を食べた者なら誰れでも、まさしくザクロ²³⁴⁶ではないかと思うであらう。われわれは、一度それを食べて大変に美味かったもので、いつもそれを捜しては食べた。

また彼ら「の地方」には、酒酢²³⁴⁷よりも一層緑色、且つ酸っぱい青リンゴがあることを私は知った。「その国の」娘達が「好んで」それを食べるので、それにちなんだ名称「娘リンゴ」が付けられている²³⁴⁸。

私がおの国で一番多く見た樹木は、ヘイゼル樹であった。事実、ヘイゼル樹のジャングルを見たが²³⁴⁹、その樹林だけが 40 フェルサフにも渡って広がっていた。

また、一体何んだかがはっきりしない樹木を見たが、それは、途轍もなく高く、幹²³⁵⁰に葉なく、てっぺんは丁度、ナツメ樹に似ており、ただその葉は「ナツメ樹のそれとは違つて」密集していた²³⁵¹。彼らは、見定めその樹木の所に行つて²³⁵² 幹に穴をあけ、その下に皿を置く。するとその穴から蜂蜜にまみれた美味な水が流れ出てくる。人がそれをあまり飲みすぎると、丁度酒によつたような気分になる²³⁵³。

§ 9. 彼らの主要食物としては²³⁵⁷、小麦や大麦も多いが、一般には粟と馬肉²³⁵⁸である。耕作する者は何人も自らのために収穫し、王はその件について何等「収穫の」権限をもっていない²³⁵⁹。ただし、毎年、彼らは一戸あて黒貂の毛皮²³⁶⁰一枚を王に納めることになっている。

また²³⁶¹、王がある地方に攻撃を加えるための軍団の派遣を命令し、「その結果、勝利を得て」戦利品を獲得した時には、王は彼らと分け前を共にする。

結婚披露宴を行つたり、「その他」人を招いて宴会を行つた人は誰れでもその宴会の規模に応じて²³⁶²、賦課金、蜂蜜酒からつくつたサーフラフ sakhrakh²³⁶³と腐った小麦——彼らの土地は黒く、悪臭を放つために、そのようになる——を王に納めなければならぬ。

彼らには食糧を貯蔵して置くような場所はなく、せいぜい地面に穴を掘つて、その中に食糧を入れて置くのであるが、それにしてもわずかな数日しか保存がきかず、結局は使いものにならない程に変化（腐敗）し、悪臭を放つようになってしまう。

彼らにはオリブ油、ゴマ油、油脂は全くなく、ただそうした油脂類の代りに魚油を使っている。その油を用いて作つた料理は、どれも油っこい²³⁶⁴。

女奴隷や下僕達が好んで食べるものとして、彼らは大麦をつかつたスープをつくる。大麦の肉入り料理をつくつたときには、まず主人達がその肉を食べ、女奴隷には大麦「だけ」を食べさせる。ただし、その肉が雄山羊の頭「肉」のときには、彼女達はその肉を食べることが出来る²³⁶⁵。

§ 10. 彼らはみな帽子²³⁶⁶をかぶっている。王は馬に乗って外出するとき、ただ一人の従僕・随行者もつけずに、王単独で出かける。王が市場の中を通るとき、fol. 207 a 人残らずすべての人々は起立して、頭の帽子を取つて陛下にはさむ。王が通りすぎしまえば、「再び」着帽する。

また王に謁見する者もこれと同じく、王の姿を見た際には、王の息子や兄弟達であらうと身分がわづ²³⁶⁷ すべての人々は帽子を脱いで陛下にかかえ、頭をさげる²³⁶⁸。次に彼らは、「一度」座ってから「再び」立上つて、王の座れという命令があるまで、そのまゝの状態にいる。

王の面前に座っている者は何人も「座っているといっても」実際には立った状態で座っているものであり、しかも王の前から退いて、着帽するまでは決してその帽子を動かしたり、ちらつかせたりしてはならないのである²³⁶⁹。

彼らすべては、テント住いである²³⁷⁰。しかし王のテントは特別に大きく、1,000

人乃至それ以上の人を収容することが出来、[テントの内部には]アルメニヤ製の絨毯が敷きつめてある。しかも、そのテントの中央部には、ルーム製の銅織の覆いつき玉座がある。

§ 11. 彼らの慣習について。もしある人の息子に子供が出来ると、その子供の父ではなく、祖父が

「彼(子供)が一人前の男に成長するまでの養育については²⁵²⁷、彼の父親より私に権利がある」

と言って、その子供を引取るのである。また、彼らの中の一人が死んだとき、彼を継ぐのは、その子供でなく、彼の兄弟である。[その話を聞いて]私は王に、そのようなことは「イスラーム法によれば」違法であることを教え、また[合法的な]相続とはどういうものであるかを納得のいくまで説明した。

§ 12. 私は、彼らの国で最も数多く雷に遇った²⁵²⁸。雷が家(テント)に落ちると、彼らは決してその家に近寄らず、その中にあったもの、たとえ人間であろうと金銭であらうとその他すべてのものをそのままの状態に放置する。すると、やがては年月がそれらすべてを崩壊してしまう。彼らの説明によると、それは[神の]怒りにふれた家である²⁵²⁹、と。

§ 13. 彼²⁵³⁰らのある者が故意に人を殺した場合には、彼らはその人に同罪の刑を科す。一方、過失によって殺人を犯した場合、彼らは白ボブラの木²⁵³¹で一つの箱を造って、その中に彼[即ち罪を犯した人]を入れて釘づけにする。その際、3切れのパンと土瓶を彼に持たせる。次にラクダの荷鞍²⁵³²に似た3本の棒杭を立てて、その杭の間に彼を「箱と共に」釣下げて、

「雨と太陽があたるように空と地面の間に置こう。おそらくアッラーフは彼をお隣れみ下さるでしょう」

と言う。吊されたまま時がたつにつれて、[腐敗し]やがては風塵に帰してしまうのである。

才氣煥発にして諸殺のことに智力を備えた人に出合うと²⁵²⁷、彼らは、

「この人は、われわれの神にお仕えする²⁵³³のが本望でしょう」

と言って、彼を捕え、首に縄を掛けて、ばらばらになるまで木に吊しておくのである。ある時、王の通訳は私に次の様な話をしてくれた。嘗て²⁵³⁴、その国にシンド

Sind 人がやって来て、しばらくの間、王のもとに滞在して仕えていた。彼は頭の良い²⁵³⁵男であった。丁度、彼ら[サカーリバ人]のある一団が商業取引に²⁵³⁶旅立ちとうとしていた。そこで、そのシンド人は王に彼らと一緒に出かけたいと願った。王はその願いを斥けたが、彼は執拗に許しを請い、結局、彼らと共に船に乗って出発してしまった。[その商業取引の結果]彼らは、彼が大変な手腕家であり、頭脳明晰なることを知った。そこで彼らは相談の末、

「この人はわれわれの神²⁵³⁷に仕える下僕としてうって付けた。だから、彼を神のもとに遣わすとしよう²⁵³⁸」

と言って、帰る途中、ジャングルの近くを通過したとき、彼をその中に誘い入れ、彼の首に縄をかけて、高い木のてっぺんに括りつけ、そのまま彼を残して立去った。

§ 14. 行軍²⁵³⁹の途中、彼らの一人が小便をしなくなって、武器をつけたまま放尿したとなれば、彼らはその者を捕え、その武器²⁵⁴⁰、衣服および所有している一切のものを没収する。つまり、これが彼らの慣例なのであって、武器を一旦おろして、傍に置いた後、放尿すれば何も問題は無いのである²⁵⁴¹。

彼らは男も女も河に行って、互いに全く身体を隠さず茶裸になって水浴するのが常なのであるが、決して淫猥・無作法²⁵⁴²なことは起らない²⁵⁴³。たとえ何人であらうと、その禁を犯した者に対して、彼らは4本の鉄棒を地面に打込み、その者の両手足をその棒に結びつけて、斧の首のつけ根から股に達するまで[真二つに]切断してしまう。このことは女についても同様に行う。[切断した後]その男女の肉片を一つ一つ木に吊しておく。

水浴の際は²⁵⁴⁴、女は男の前から身を隠すようにと私は、彼らを諭そうと尽力したが、結局、充分に彼らを納得させるまでには至らなかった。彼らは私通者に対しても盗人に対しても同じく死刑に処する。

§ 15. ジャングル²⁵⁴⁵の中に見出される蜂の巣からは豊富に蜂蜜が採れ、彼らはその[巢の]所在をよく知っていて、[必要なときには、]それを採りに出かける。

その際、彼らの敵部族に出合えば、その敵を殺す。

また彼らの国内には、羊を買付けにトルコ国へ、あるいは黒貂と黒ぎつね[の皮革]を齎らすためにウィースーと呼ばれる国に往来している多数の商人達が、いる。

§ 16. われわれは、彼らの国内で男女5,000人からなる血縁集団²⁷¹³を見た。彼らは、すべてイスラーム教に帰依していて、一般には彼らはバランジャー^{al-Balanjar}と呼ばれている。彼らは自分達で礼拝用の木造のマスジドを建てたが、コーランの誡諭を知らなかったのだ、私は如何に礼拝すべきかを彼ら皆に教えた。さて、私を通じてタールート^{Talut}という男がイスラーム教に帰依することになり、[一応、]彼にアブド・アッラーフ^{'Ald Allah}という名を授けてやった。すると彼は、

「あなたのお名前であるムハンマド^{Muhammad}というのをつけてもらいたいのですが」

と言った。そこで私は彼の言う通りにした。その上、彼の妻、母親と子供達がイスラーム教徒になり、すべてムハンマドと呼ばれることになった。私は彼に《アッラーフに称えあれ》と《言え！アッラーフこそ唯一なり、と》[の2つの]を教えた。この2つの[を知ったとき]の彼の悦ぶ様子は、まるで彼自身がサカーリーバの王になった²⁷¹⁴かの喜びにも増して大きなものであった。

fol. 208 a § 17. さて、われわれが王のところに到着したとき、王はハルジャ^{Khaljat}と呼ばれる水辺にキャンプを張っていた。

ハルジャは3つの湖からなり、その中の2つは大きく、1つは小さいが、その湖底に達しようとしても全く不可能である。その場所とハザル国に通じるアティルという大河との間には、約1ファルサフの隔りがある²⁷¹⁵。また、その河畔には短期間を置いて開かれる市場²⁷¹⁶があり、その市場では高価な商品が多量に取引されている。

§ 18. 嘗て、テギーンは、その王の国には非常に大きな体の人間がいる、と私に語ったことがあった²⁷¹⁷。そこで私はその国に到着するとすぐに、そのことを王に聞いた。王は、

「その通りだ。彼は嘗てわれわれの国に居たが、死んでしまった。しかし彼は、この国民でなければ、人間でもないのだ」

と言って、さらに次の様な話をした。

「ある商人の一隊がいつものようにアティル河²⁷¹⁸に向けて出発したことがあった。当時、河は増水し、氾濫していた。ある日、突如としてその商人連中が私のところに[良くて]来て、次の様に言った²⁷¹⁹。"おお王様よ。河に人が浮

んでいます²⁷²⁰。彼がわれわれと親密な同胞の一人²⁷²¹であると言うのであれば、もはやこの地に留めることは出来兼ねます。[別の地方に]移る外ないでしょう、そこで、私は彼らと一緒に馬に乗って出かけ、その河に着くと、果たせるかなその男に出合った²⁷²²。よく見ると、その男は私の背丈から算定すると12ザラー^(dharā)あり、その上、特大の深鍋²⁷²³ほどもある頭、手のひらよりも大きな鼻、巨大な2つの目、一枚一枚の手のひらよりも大きな指をもっていた。そのことに私は大いに驚き、先きにあの商人連中も経験したであろう恐怖に襲われた。

私は彼に近づいて言葉をかけてみたが、彼はじろじろと見るだけで、何も言わなかった。そこで、彼を私のところ²⁷²⁴に連れて帰る一方²⁷²⁵、われわれのところから3カ月旅程のところに住むウィースー人のところに書状を送って、その男についてたづねた。彼らは、私に返答を送り、次の様なことを知らせてきた。"その男は、われわれ[ウィースー]のところから3カ月の距離を隔てたところに住むゴグ・マゴグ^{Gog wa Majog}の一人である。

彼らは操で生活している。われわれと彼らとの間には海が介在しており、その海の岸辺に生活し、まるで牛馬と同じよう²⁷²⁶に互いに離婚する。いと高き偉大なるアッラーフは、毎日彼らの為にと海の魚を授けられている。彼らはみなナイフを持って来て、自分とその家族にとって必要なだけの量[の魚]をさがす²⁷²⁷。もし必要以上をとると、本人は勿論、その家族の者までが同じように腹をこわしてしまい、そのために本人および[家族]全員が死ぬこともある。したがって、彼らが必要な分だけ²⁷²⁸をとると魚は自ら方向を転じて、

海に下っていくのである²⁷²⁹。彼らは毎日、そうした生活を送っている。われわれと彼らとの両地の間には、一方は海、他方は彼らを取巻く山脈となっていて、また、彼ら[が住む所]と彼らの出口となっている城門とを隔てる障壁²⁷³⁰がある。いと高き、偉大なるアッラーフは、彼らを入里に移そうと望まれ、障壁を開かれた。すると、海は減水し、魚は彼らから離れた²⁷³¹」

彼(イブン・ファドラーン)は語った。尚も私は王にその男のことについて尋ねた。すると王は次のように語った。

「しばらくの間、その男は私のところに居た。しかし、子供達は彼を見ると必ず死に、妊婦は流産するのが必至であった。しかも彼らは人々を掴まえると両手で締めつけて殺してしまった。こうしたことを知って、私は彼を高い木に吊し

た。かくして彼は死んだ²⁹⁹。その男の骸骨と頭を見たいのであれば、案内して
お見せしよう」

そこで私は、

「是非、そうお願いしたいものです」

と答えると、王は私をつれて馬に乗り、大きな樹木の繁る大ジャングルに出かけた。
そして、とある木のところに案内される³⁰⁰。と、その男の骸骨と頭がその木の根も
とに転がっていた³⁰¹。見ると、その頭は、丁度、蜜蝋の大果箱³⁰²ぐらいあり、あ
ばら骨はナツメ椰子の枝よりも太く、また一対の足骨と一対の腕骨についても同じ
位あった。私は、驚嘆して、引返してきた次第である。

§ 19. イブン・ファドラーンは語った。

王³⁰³は、ジャーウシーズ Jawshiz³⁰⁴ という河に赴くために、ハルジャと呼
ばれる水辺 [のキャンプ地] を引払った。そして、そこ (ジャーウシーズ) に
2 カ月間滞在した。王は、なおも進軍を欲して、スワーズ³⁰⁵ Suwāz という部
族³⁰⁷のところに使者を派して、王と合同で出陣するよう命じた。しかし彼らは、そ
れを拒否した。

[その問題で、] 彼ら (スワーズの人々) は、2つの党派³⁰⁸に分裂した。その一つ
は、[サカーリバ] 王族の一人³⁰⁹——その名を ワイラグ Wayragh と行って、[党
の] 支配権を有していた——の率いた党であった。

しかるに [再度、] 王は、使者を彼らのもとに派遣して、

「まことにいと高き、偉大なるアッラーフは、私をイスラーム教徒となし、教
虔信徒の長の帝國³¹⁰に所屬せしめる恩恵をお与え下された。よって、私は彼
の奴隸なのである。すでにこの民は³¹¹、私に全権を任せている。したがって、
もし私に齒向う者がいれば、その者に剣を浴びせてやる」
と伝えた。

もう一方の党は、アスカル Askal 王³¹² という名で知られた部族の一族によって
率いられていた。彼は、[サカーリバの] 王の支配下にあるとは言え、未だイスラ
ーム教に改宗していなかった。

[サカーリバ] 王がその通達を送ると、彼らは王の策謀を恐れて、挙って王と共に
ジャーウシーズ河に向けて出発した。

その河は、河幅5ザラーの広くない河で、水深は胸ほどであるが、鎖骨に達す
る地点もあり、人の身長の高さに達するところも多い。その河の周囲には、ボブ

ラ樹などが大部分を占める樹林 [地帯] になっている³⁰⁶。

その河の近くには、広漠たる砂漠 (sahra) がある。彼らが宿るところによると、
その砂漠には、大きな点でラクダでもなく、牛よりも大きい、ある [種の] 動物が
いる。その動物の頭はラクダの頭、尾は牛、体はラバ、ひづめは牛の分趾蹄に類似
し、その頭の中央部には一本の太く彎曲した角があり、角は伸びるにつれてまるで
植先のように鋭く尖る。その長さが3~5 ザラー前後になるものもある。

その動物は、木の葉の、とくに緑色の部分を食べ、馬に乗っている人を見ると、
追いかけて来る。もし、乗っている馬が良馬であれば、その騎手は、辛うじてその
物から逃失せることが出来るが、一たび追付かれると、馬の背後からその角に引
かけられて、空中に放出されてしまう。そして何度となくその角の攻撃を受けて、
ついには殺される。しかし馬には決して危害を加えない³⁰⁷。

ところで彼らは、その動物を殺すために、砂漠や森林の中を捜しまわった。先ず、
彼らはその動物のいる [森林の中の] 高い木に登り、毒矢をもった数人の射手が集
まる。次に彼らの丁度中央部にそれを追込んだとき、矢を放ち、弱らせて殺す。

私は王のところでイエーメン産の縞馬環に似た3つの大深鉢³⁰⁸を見た。王の説
明によると、その深鉢は、その動物の角幹で造ったのである³⁰⁹、と。しかし、その
国のある人は、それは犀 [の角] であると言っていた³⁰⁷。

§ 20. イブン・ファドラーンは語った。

私は³¹⁰、彼らの中で体色の赤い [健康な] 人を見たことはなく、彼らの多くは病
気もちであって³¹¹、紅腫³¹²で死ぬ者が多く、赤子までもその病気がおよんでいる
程である。

さて、イスラーム教徒やホラズム生れの妻をもった [サカーリバ人の] 夫³¹³ が
彼らのところで死去したとき、彼らはその遺体をイスラーム教徒 [が行うと同様]
の洗身法で洗身した後、車に引いて運ぶ。その際、遺体の前に旗を掲げて³¹⁴、埋葬の
場所に行く。そこに着くと、遺体は車³¹⁵からおろされて地面に置かれる。その後、
遺体の周囲に線を描いてから、遺体をわきに退け、その線の内側に穴を掘って遺体
安置室をつくり³¹⁶土をかぶせる。彼ら (サカーリバ人) についても同じように彼ら
の死者を葬む。

死者の前で泣くのは女ではなく男の方である。忌日に男達は、やって来て³¹⁷、彼
(死者) のテントの入口に立ち、ひどく見苦しい、そして哀愁をおびた声で泣叫ぶので
ある。次のことは奴隷でない者達 (自由民) ³¹⁸が行なうのである。彼ら男達の泣数は

途切れると、燃った皮紐をもった奴隷達が現われる。すると彼らは脇腹やむき出しになった股体を鞭の跡がつくほどその黒貂の皮紐²²⁰で打ち、泣きつづけるのである。

fol. 209b また、その「死者の」テントの入口には旗を掲げ²²¹、彼(死者)の武器を持出して墓の周囲に置き、泣歎は2年間欠かさないこと「以上」が義務とされている。その2年間が過ぎると、旗を下し、毛髪を下し、死者の近親達は、喪が明けたことを意味する宴会を行う。そして、もしその故人に妻があれば、妻は再婚することが出来る。以上は「むしろ」、その国の首長達²²²の行う仕方であって、一般民衆の場合には、死に際して以上「述べたこと」の一部を行う「にすぎない」。

§ 21. サカーリバの王には、ハザルの王に納めるべき貢租として、国内の各戸毎に²²³一枚あての黒貂の毛皮が課せられている。

船がハザルの国を出て、サカーリバの国に到着すると、「サカーリバの」王は自らその船に乗り込んで、船内に積載している物を算定し、その「船荷」全体の10分の1を税として徴収する。また、ルース人やその他の部族²²⁴が奴隷を連れてきた場合、王は「その奴隷」10人に付き1人を選びとる権利を有している。

§ 22. サカーリバの王の息子は、ハザルの王のもとに人質として送られている。嘗て、ハザルの王はサカーリバの王の娘が美しいのを知って、その娘を嫁にもらいたいと伝えてきた。しかし、サカーリバの王は口実を設けて、それを拒絶した。するとハザルの王は、人(軍隊)を派遣して、その娘を力づくで奪った。

ところで、ハザルの王はユダヤ教徒であり、一方、その娘はイスラーム教徒であった。結局、娘はその王のところで死んだ。すると、今度はサカーリバの王のもう一人の娘を要求してきた。その報がサカーリバの王のところに達すると、王は先にハザルの王がその娘の姉に対して行った同じく、またも力づくで奪いとられるのではないかと危惧して、急遽、王の従属下にあるアスカル王と娘を妻わせた。しかし、サカーリバの王はハザルの王「からの報復処置」に脅威を感じて、スルタンに書簡を送り、城を築いてくれるよう請願するにいたった²²⁵。

イブン・ファドラーン は語った。ある日、私は王に次のような質問をした。

「あなた様の王国は広大、且つあなた様の財産はさぞ豊かでありましょう。またあなた様が得る地租も多いことでしょう。それなのにどうしてスルタンをたのみとした資金で城塞を築きたいなどと願出たのですか。たとえスルタンは

計り知れない程の²²⁶財産をお持ちになられているとはいえ」

「思うに、イスラーム世界²²⁷は繁栄し²²⁸、彼ら「カリフ達」の財産は、合法的な手段によって得られたものである。つまり、この理由から私はあえてそのような願いを出したのだ。しかるに、もし私が私自身のもつ銀や金の財産を用いて、城塞を築こうと思えば、そんなことは何も難しいことではないのだ。ただただ敬虔信徒の御資金を仰ぎたいと思って、その件を願出ただでだ」

と言った。